

保険薬局薬剤師にとってがん患者へ関わるために「壁」となるものは？

本田雅志 そうごう薬局 天神中央店

近年、がん薬物療法は外来での実施がますます増加しており、保険薬局においてもがん患者に関わる機会が増えている。一方で、がん患者への応対は保険薬局薬剤師が抵抗感を感じやすいものであることが予想され、保険薬局薬剤師による適切なケアの妨げとなるおそれがある。がん患者への応対についての抵抗感は、がん患者応対の経験の有無、知識や応対技術の習得度合、またがん患者の悩みに寄り添うことへの不安など、様々な要素が関連したものであると考えられるが、詳細な検討は未だなされていない。今回、保険薬局薬剤師を対象として、がん患者への応対に対する自己評価についてアンケート調査を実施した。アンケート内容は、がん患者応対の頻度、応対に対する抵抗感、知識やコミュニケーション技術への不安、薬学的な問題点を見つけた時の介入への抵抗感、患者が抱えている悩みに寄り添うことに対する不安、処方箋を発行している医療機関との連携の状況、がんに関する学習状況などを問うものとなっている。アンケート結果について本シンポジウムで紹介することで、保険薬局薬剤師ががん患者応対に対する抵抗感を減らすためにはどうすべきかを共に考えたい。

また、そうごう薬局天神中央店は2012年より外来がん薬物治療患者ケアを深めることを目的として様々な取り組みを行っており、現在では4名が外来がん治療認定薬剤師（APACC）を取得するなど、より良い外来がん薬物治療患者ケアに貢献できるようになったと考えられる。当薬局の行ってきた外来がん薬物治療患者ケアの質向上のための取り組みや、がんを専門とする薬剤師の育成例などを紹介することで、がん患者をサポートできる薬局作りや、外来がん薬物治療に関する薬剤師教育の参考になれば幸いである。